ええい、このスイッチだ！

ノラネコ軍団

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

機動戦士ガンダムの世界にアムロ・レイとして転生してしまった男の話。

ただ無双とかは恐らくない。アムロ以上の活躍とかハードル高すぎィ！

目　次

オレ、アムロ・レイってゆ――んだ!!ヨロシクな!! ―――― 1
ガンダム破壊作戦 ―――――――――――――――――――― 8

オレ、アムロ・レイってゆ――んだ!!ヨロシクな!!

思うにアムロ・レイはすごいヤツである。

元祖ウジウジ系主人公として燦然とアニメ史に名を残していた彼だが、メンタル、モチベーション、強さなどどれをとっても彼は世間で思われている以上に主人公らしい主人公だ。

つまるところ他の主人公と比べた時、相対評価を下すなら彼はオタクっぽい少年だが絶対評価を下すならば彼は充分、主人公たる資格を持っているのである。

アニメ特集なんかで多く取り上げられる「親父にもぶたれたことないのに！」のシーンとか、よく考えると非常に妥当な物言いではないだろうか。

何の訓練もやってないのに殺し合いに駆り出されるだけでなく、肝心の上司はいまいち信用ならないなんて状況、泣き言のひとつも言いたくなるもんである。むしろあの後、あ幼馴染の女の子のために奮起するという事実をこそ見るべきである。あんなのフラウじゃなくても惚れる。

まぁつまり、何が言いたいかと言うとだ。

ごく平均的な人生を歩んできた日本人男性がいきなり機動戦士ガンダムの主人公にさせられたりするのは無茶があるということである。絶対無理である。ア・バオア・クーまで持つ気がしない。グリプス戦役とか絶対無理だし、アクシズ落下阻止なんてプレッシャー（NT的なヤツではなくストレス）に耐えられるはずもない。そもそも僕がニュータイプに覚醒する未来が見えない。

ジャブロー行く前に死にそう。

『頑張って。あなたなら出来るわ』

「気休めを言わないで下さいよ…」

そういう無茶な状況に自分は放り込まれているということである。

サイド7から出港したばかりのホワイトベースから出撃したガンダムのコックピット内。

通信越しのセイラさんの言葉に対する返しは図らずも原作のアム

ロと似たようなものだった。そりゃこうも言いたくなるわ。
自分がアムロ・レイであることに気が付いたのは2．3歳くらいの頃だったろうか。
父親名前はテム・レイ、母親はカナリア・レイであり、両親の顔もおおむねアニメの作画を忠実に実写化したらこんな感じだろう、というものだった。
だからもっと早く気がついてもおかしく無かったのだが、現実感が出てきたのは揺り籠から出てからだった。テレビに映る世間のニュース、家庭内で口走られる父親の仕事についての発言などから、「ああ、ここ宇宙世紀なんだな」とどうしても実感せざるを得なくなった。
ただ、それでもあくまで宇宙世紀に暮らしているという現実感が得られただけである。「すげー」くらいの気持でぼんやり過ごしていた自分が、あのガンダムのパイロットであるアムロ・レイなのだという実感を得たのはもっと後、両親が別居して父と共にサイド7に住むことになってからだった。僕は原作通り、父についていくことを決めた。
いまから思えば父についていくべきでは無かったかもしれない。
母と一緒にいれば少なくとも兵士として前線に駆り出されることは無かったはずで、せいぜいが戦地で脅えて暮らすくらいの展開になったろう。まぁカナリアの末路はアニメ作品では描かれていないので絶対安全と言うことは無いだろうが。
それでも何故父についていったかと言えば、それは結局のところテンションが上がっていたということに尽きる。前世の自分はロボットアニメファンの末席であり、モビルスーツに乗るというシュチュエーションは定番の妄想シチュエーションだった。子供の頃からガンダム漬けで、ガンプラは沢山作ったしＰＳ２版機動戦士ガンダム二部作、連ジ、一年戦争と様々なゲームも遊んだ。
松戸のガンダムミュージアムで等身大ガンダムの上半身に感動し、富士急ハイランドの横たわる等身大ガンダムに感銘を受け、お台場に至ってはため息しか出てこなかった。そんな少年だったのである。

テンションが上がらないはずがない。
だが。そんな上がり切ったテンションはやがて巨大な不安へと変わっていった。
そもそも僕はアムロ・レイとしてまっとうに活躍できるのだろうか。どっかでヘマとか起こさないと言い切れるだろうか。そもそも――――ニュータイプとやらに覚醒できるのだろうか？
ガンダムの物語、それもアムロの人生に関して考えると、明確にこうすればハッピーエンドに向かえる！というようなものが少ない。ララァを殺さないだとか、グリプス戦役に参加してカミーユのメンタルを支えるだとか、もうちょっとクェスとハサウェイに優しくしてあげるとかそんなものである。シャア？あれはどうしようもない。
アムロ・レイはこうした細々とした人間関係に関するポカはあるものの、それを補って余りあるニュータイプとしての素質とパイロットとしての才能を持っているわけで。こうしてアムロの立場になったからと言って出来ることは限られている……どころかほとんど無いのである。
「カミーユならいざ知らず、アムロじゃ無理だろ…」
そんな風に絶望的な気持ちに襲われたのは宇宙に上がりサイド７の学校に通い始めて数か月たったころだった。アムロ・レイに出来ることが絶望的に少ない。後出しじゃんけんが今の自分の最大のイニシアチブなのだが、自分が手を出して自体が好転するポイントが恐ろしいほど無い！
ホワイトベースの窮状の半分は誰かのせいではない。ホワイトベースに雪崩れ込んだ大量の難民、補給も援軍もままならない状況での逃避行、それをパオロ艦長のような経験ある軍人が死んでしまったことで１９歳の新人士官が指揮せざるを得ない状況。すべて間が悪かったと言うほかない。強いて言うなら悪のジオン星人が戦争を起こしたのがすべての元凶である。
父さんに色々吹き込むことを考えたがそんなうまく行く気がしなかった。そもそも中学生の自分の言うことを軍人の父が聞くだろうか？冨野的世界観で？絶対あり得ない。

こうして悶々とした日々を暮らしつつ、それでもなんか出来ないかと頭をひねっていたある日、逆転の一手が思い浮かんだ。原作よりもっと良い展開を作り出す方法。それはガンダムに乗ってすぐに訪れる。サイド７の被害を最小に抑えて、父をホワイトベースに合流させることである。

テム・レイについて多くの人のイメージはサイド６のジャンク屋ではしゃぎつつ謎の機械を差し出してくる酸素欠乏症にかかった姿であろう。だがあれは長い宇宙漂流の結果ああなってしまっただけで、実際はそこそこきちんとした人間である。実際、一緒に暮らしていた感じとしては１００点満点の頼もしい父と言う感じでは無かったが、どうしようもない毒親と言うわけでもない。もう少し母とコミュニケーションを取ってくれれば……と思わないでもないが、仕事と家庭の比重が偏ってしまうなどということは起こりがちである。総じて、まっとうな大人と言える。アムロ・レイとして知らない部分を鑑みてもアニメでの初登場での台詞を見るに自分の息子を積極的に戦争に参加させるタイプの人間ではない。彼が生きていれば、技術的な知見でホワイトベースの状況は多少なりとも改善するかもしれないし、そもそも息子をガンダムのパイロットとしてメインに用いさせようだんてことも考えないはずだ。上官のひとりでもいればブライトさんの胃の負担も多少なりとも抑えられるはず。

父をホワイトベースに合流させることには他にもメリットがある。サイド７に穴が開いたことで連邦軍人が何人か死んでるところを見ると、あれを阻止するだけで状況はかなり改善するのではないか。ホワイトベースの人手不足が改善され、パオロ艦長が砲座に就くことも無く、何とかジャブローまで安定した航海をすることが出来るようになるかもしれない。よし、当分の目的はこれだ。これで行こう！

「……あれ、ザクの動力炉ってどっちだ？」

そう思ってたこともありました。

父が出張に出かけて帰ってくる予定日、避難命令が出て幼馴染の女の子に起こされて手作りサンドウィッチを朝食にするという最の高

なイベントをこなし、そういえばフラウの両親死んじゃうじゃんということで「親父の伝手で色々聞いてるけどホワイトベースって軍艦が避難先として開放されるかもだから先に港に行ってた方がいいよ」とそれとなくアドバイスしつつ、自分は自分で原作通りの避難カプセルの周囲をウロウロしてマニュアルを回収。

ザクの襲撃による混乱の中で原作通りガンダムに乗り込んだ。

そこまでは良い。完全に予定通りである。

ガンダムが大地に立った瞬間はつい口角が上がり「うっひょー！原作通りじゃんけ！」と叫んでしまうくらいにはテンションが上がった。

とりあえずバルカンで戦うのには限界があるし先んじてビームサーベルを装備しておこう、とマニュアルを読み読み背中のラックからサーベルの柄を取り出し、両手で構えさせた瞬間、そもそも論にぶち当たったのである。

ザクってどっちが動力炉でどっちがコックピットだっけ？

ザクのコックピットの開き方！

これには多彩なバリエーションがある。

胸部のＴ字に見える黒いパーツ全体が開くもの、右が開くもの左が開くものなど様々だ。

みんなはザクのバリエーションだとどれが好きかな？

僕はＦ２型。あの複雑でかっこいい胸のパーツいいよね……いい……

さて、そんな僕だがこの期におよんでそんな初歩的な疑問にぶち当たり、状況も状況なのでテンパっていた。

これまで予定通りだっただけになおさらである。

「えっと、右だったような……いや待て昔作ったガンプラだと左じゃなかったか？そう、結構細かいパーツで……」

そうこうしているうちにもザクはずんずんと進んでくる。

あれだろうか、今頃「へへっ、怯えてやがるぜこのＭＳ……！」とか若本ボイスで言っているのだろうか。

どっちがジーンでどっちがデニムなのかはガンダムのコックピッ

トからは分からないけど。
などと今現在の状況には一ミリも役に立たない記憶が想起される。
そうこうするうちにザクはマシンガンを容赦なくガンダムに連射。
ズガガガ、と容赦なく弾丸が跳ね返る衝撃、衝撃を受けたことで鳴り響く警告音、それと同時に通信機から『何をしているガンダムのパイロット！ビームサーベルを使うんだ！』と父さんの声が響いてきてなおさら焦りが増していく。
このまま好きにさせておくのは絶対不味い。
いくらトンデモ装甲もちのガンダムでもいつまでも無敵ってわけではないはず。
「くそっしょうがねぇな！」
何が悲しくてガンダムの初陣にクイズ番組みたいな状況に陥いらねばならないのだろう。
だがここが正念場だ。
ここでミスれば原作よりイージーモードに突入させる計画はすべて水泡に帰す。
腹を決めるしかない。
「僕はニュータイプ僕はニュータイプ僕はニュータイプ……よし、決まった、左だっ！」
前世のガンプラを作った時の記憶に従う！
――――後から思えば、だが。
僕はもう少し、自分のガンダム知識を整理しておくべきだったかもしれない。
僕が好きなザクは？Ｆ２型だ。
僕がよく作ったガンプラは？Ｆ２型だ。
印象に残っているのは？Ｆ２型だ。
Ｆ２型は何に登場した機体か？００８３だ。
一年戦争の中でも配備されるのは後の機体。
サイド７の戦いには間違っても駆り出されない。
結果は語るまでもない。つまりほとんど原作通りになった。
一機目のザクの融合炉に誘爆してコロニーに巨大な穴が開き、テ

ム・レイその他の連邦軍人は行方不明となった。
二機目のザクについてはコックピットをぶち抜き爆発を起こさずに撃破できた。
ファッキューマ・クベ。ファッキュー統合整備計画。
一年戦争のＭＳのバリエーションを増やし続けるバ〇ダイに呪いあれ！
コックピットの仕様を一々変えるとかジオニックの連中は使用者のことを考えていないに違いない。そんなんだから負けるんだよジオン公国！
こうして僕のガンダムイージーモード計画は失敗に終わり、めでたく原作再現モードへと移行することとなった。
すまない父さん、すまないブライトさんの胃。というか仮にも１５年一緒に過ごした父を救えなかったのは結構ダメージデカい。
原作を良い方に改変とかできるのか本当に。
ああ――――…
「……取り返しのつかないことをしちゃったな」

ガンダム破壊作戦

結局、ホワイトベースは原作通りてんてこ舞いの状況となった。
ザクの核融合炉の爆発を防ぐことが出来なかったことで原作改変プランその一が崩れ去ったからである。
結局連邦軍の軍人の大半は案の定死亡したようだった。
サイド7近海に周囲に父さんが漂っていないか探したかったが状況が許さなかった。
ホワイトベース側から指示があったからである。
状況から見てブライトさんだろう。ガンダムのパーツを運べ、という命令でマニュアルやらホワイトベースからの指示やらを受けながら部品をえっちらほっちら運び出した。
ガンダム、ガンキャノン、ガンタンク等をコンベアのパレットに載せてホワイトベースに搬入していく。
「たしかこれ、全部スーパーナパームで焼き払うんだっけか」
言ってから、いや、全部では無かったはずだ、と思い直す。
だって運び出したものの中に灰色のガンダムがあったのを見た。
いわゆるG3だろう。小説版だとアムロが乗っていたが、通常の一年戦争が起こる世界だろうここではルナツーまで移送した後に降ろされてマグネットコーティングの実験機となり、その後はブランリヴァルの艦載機となった……という話だったはず。
その後は星一号作戦の際に避難民が乗ったランチと激突して半壊しただの、それが原因かGブルモードでア・バオア・クー要塞の調査をしただの、ペガサスⅡの艦載機になったがパイロットがジオンシンパだっただの所説あったのを思い出す。
アムロの乗機としては唯一撃墜されたMSでもあり、碌な目に合わないかわいそうな機体である。こんなにかっこいいのに。
「どちらにせよ、速めに運び出した方がいいな」
原作で全部破壊したのはシャアの部隊に奪われないようにというのと、時間が無かったから、というのもあるだろう。
その後、ほぼ無補給でジオン勢力下を横断してジャブローにまで向

かうなんてことは想定していないからである。
少しでも多くパーツをホワイトベースまで運べば今度こそイージーモードに移行できるかもしれない。
作業の中途、フラウがカツとレツとキッカを連れているのを見つけてしまった。
断続的にコロニーに衝撃が来ている。多分ミサイルかビームでも撃っているのだろうか。
この時もコロニーに穴が開いたらしく破片がフラウに襲い掛かっていた。
僕としてはつい先ほど原作改変に失敗したばかりなのでついギョっとしてしまう。
『フラウー・家族はどうしたんだ？』
ボウ一家との関わりは深い。
アムロとして生活するとアニメで見る以上にフラウたちに世話になっていたことがよく分かる。
父親がおらず生活能力がお世辞にも高いとは言えない少年にことあるごとに世話を焼いてくれていた。
そんな人たちが死んだりしてたら今度こそ落ち込んでしまう。
父さんは軍人だし、サイド6で生き延びるルートがあるからまだ慰めになるが、彼女たちはそうではないのである
「アムロ？・アムロなの？」と困惑しつつ、フラウは家族はすでにホワイトベースに乗り込んでいて、自分は避難の手伝いをしているだけだ、と答えた。
「アムロのお陰よ、ありがとう」
『いや、色々してくれてるんだから当然だよ。今日もサンドイッチ美味しかったよ、フラウ』
「食べ方のお行儀は悪かったけど」
『フラウに限らずだけど、みんな妙に行儀に拘るよな』
お行儀と言えばセイラさんのことが頭に過ぎる。
やっぱりカイに平手打ちしてたりしたのだろうか。
あの人の発言そこまで不良じゃないと思うんだが。

やっぱりアルテイシアはお姫様だからだろうか。
どちらにせよこの緊急事態で空気を悪くする一因になっているのは確かだろう。
通信ではブライトさんとベッドに横になっているパオロ艦長が写っていた。
自分がもっとうまくやっていてもパオロ艦長が病床に倒れるのは防げなかったのかもしれない。
考えてみるとムサイとの戦いで負傷したわけだから当然か。
やたら「子供が乗っている」と連呼するブライトさんに若干反感を覚えるが、クソガキっぽい発言はなるべく控えるよう抑える。
ブライトさんは思われている以上に子供なのだ。
ただ大人をやらなくてはならない立場に置かれているだけで。殊更に子供を強調するのも、自分は大人であるアピールをしていると考えるとなんだか涙ぐましく思えてくる。
うん、そう考えると反感も収まってくる気がしてくる。
やがてムサイから艦砲射撃が届いたらしくコロニーが揺れるのが分かった。
前々から思うのだがどうしてこう、ジオン軍というのはコロニーを乱暴に扱うのだろうか。
毒ガスをまいたり地球に落としたり、そうでなくても砲撃したり。
本気でスペースノイドの支持を集める気が無いとしか思えない。
やっぱり悪のジオン星人じゃないか。
そんなわけで結局、機密を守るためにＭＳのパーツ二機分を焼き払う結果となった。
原作より一機多い分ホワイトベースに運び込んだことになる。
今のところ原作よりうまく行っているのここくらいだが、まぁコツコツやるのがいいだろう。

パーツを焼き払うべくコロニーをさまよっていると赤いジオン兵と同じく赤い服を着た金髪の女性がもみ合っているのを見つけ、すぐさま確保した。

どう考えてもシャアとセイラさんだった。
ガンダムの姿を見るとシャアはすぐさま逃げていく。
その姿を認めてからマイクを通じてセイラさんに話しかける。
「金髪さん、手に乗ってください」
金髪さんと言う呼び名。元々は小説でアムロがそう呼んでいたのを真似したのである。この呼び方は結構好きだった。ほぼ初対面なのに素直にセイラさんと呼ぶのもなんだか照れ臭かったのもある。
「ええ…」
「さっきの、シャアだな……」
逃げていくシャアをカメラで追いながらつぶやいた。
まだかっこいいがこれからロリコンになる上に地球に隕石落とそうとするヤツになるのだと思うとここで撃ち殺しておいた方が幾分か地球圏のためになりそうな気がしないでもない。
もっともそんなことをすれば今後の歴史に多大な影響が及ぼされるのは確かである。
ホワイトベース隊がガルマを倒せたことはシャアによるところが多いし、僕が知っている今後の展開が全く違うものになるだろう。
何よりセイラさんも曇るのは間違いない。
「……何故、そう思うのかしら」
僕の発言にセイラさんは喰いついてきた。
「赤い彗星っていうくらいですし。赤いんじゃないかなー……なんて」
しかし言われてみればあの短時間かつ遠目でシャアと判断するのも無理がある。
苦しい言い訳になってしまった。
まさか全部答えを知っている、なんていうわけにもいかない。
「しかしどっちも赤みたいなピンクの服というのは。やっぱ兄妹なんだな……」
「っ」
しまった。
気が緩んで取り返しのつかないの失言をしてしまったことに気が

付く。
何せ金髪さんが息を呑んで目を見開いてカメラ部分を睨んでいるからだ。
完全にアニメを見ながら感想を言うノリでこの世界最大のネタバレを言ってしまった。
「いやぁ、強大！強大そうなジオン兵ですよね！あ、これからハイパーナパームで色々焼き払うんで、伏せててください危ないですから」
お道化た態度とナパームの危険を訴えて何とか誤魔化しにかかるがセイラさんの表情は依然として強張ったものとなっている。完全にやってしまった感じが否めない。
相手がザクなら人間じゃないんだ、という名台詞がある。
ゲームなんかでも良く使われるあの台詞だ。
ＭＳ越しなら人間のように気兼ねなく撃てる、と解釈されがちである。
だがその本来の意味は「ザクならば人間のように小さくないからビームライフルでも狙撃できる」が正解である。
翻って現状。
ブライトさんの指示でサイド７の港から僕とガンダムは宇宙空間へと飛び出した。
指示としては逃げていくジオン兵の狙撃である。
だが相手は人間なのでやっぱりうまく当たらない。
「ザクじゃないんだから当たるわけないだろ！」
つい、そう愚痴ってしまう。
ブライトさんが通信機越しに睨んできたが無視しておく。
誰もかれも余裕がないのがホワイトベース隊の欠点だ。
このヒス男と今後も付き合っていかなくてはならないことを思うと気がめいってしまう。
というか先述の通り、ここでシャアを倒してしまうのは状況的にかなり不味い。
むしろ当たってしまったらこっちが困惑する場面である。
なので申し訳程度にライフルをばらまいて、シャアが帰還するのに

任せておいた。
『ゲートセンサー３６０度、オールラジャー』
『肩に力が入りすぎのようだな。大丈夫、コンピューターがやってくれますよ』
ミライさんとブライトさんのやり取りが通信越しに流れてきた。
ミノフスキー粒子を戦闘濃度に散布するというアナウンスは流れていないので現状では通信は自由である。
こういうアナウンスを聞いていると色々とテンションが上がってくる。
『ガンダムのアムロ君へ。ホワイトベースから遠すぎるようだ。本艦の右１０キロに位置してくれたまえ』
「うっす」
その後も操舵についての指示、リュウさんがコアファイターで出撃したことや、民間人クルーへのレクチャーが続いていく。
金髪さんやハヤトくんの声も聞こえてくる。そういえばこの時点で即席クルーとして駆り出されていたんだっけか。
原作キャラとの関係は……どうなんだろ。
原作とほぼ一緒かもしれない。
カイさんとは少し仲が良いくらいか。
将来ジャーナリストになるだけあって物事を面白おかしく伝える才に長けている。
地球から届くニュースについて面白おかしく解説してくれたり男子の嗜みちょっとエッチなものを積極的に貸し出してくれたり。
逆にハヤトくんとは距離が開いている感じがある。
まぁもともとレイ家のサイド７への引っ越しに際して家を立ち退かされる、というところから関係がスタートしているのに加えてフラウのこともあるし、好かれる要素が少ない。
僕としては原作の人物同士のカップリングは崩したくないというか、むしろ二人のことは応援してあげたいくらいなので、積極的に支援したいくらいなのだがイマイチ彼にはその気持ちが伝わっているとは言い難い。

彼、ああ見えて体育会系だからな。怒らせると恐そうだし仲良くしたいんだが。
セイラさん？さっき下手うったばかりである。
『高熱源体接近！』
声を挙げたのはブリッジの高い席でオペレーターをしているメガネをしていない方の人である。
マーカー……いやオスカーだったか？どっちだったっけ？この二人はいつもセットで呼ばれているイメージがあってどっちがどっちか分かりづらいところがある。
オスカー（仮）は続けてキャッチしたミサイルの報告を続けた。
『大型ミサイル！回避運動は左１２度、下へ８度！』
ブライトさんは操舵係に任命されたミライさんに回避させるよう指示を出す。が、もたついたのか「遅い！」と苛立った声を挙げた。
なんだか色々思い出してきたぞ。
ここらへん、ゲームだと省略されがちだがムサイからミサイルが発射されるのだった。
それをアムロのガンダムが狙撃するのだ。
「キャッチした！」
アラートが鳴り、ゲームでよく聞く例の台詞を叫ぶ。
なんかカラオケで狙った通りの音程が出たみたいで楽しい。
「狙い撃つ！」
『頼んだ！』
ロックされたのを確認して銃口から蛍光色が飛び出す。
爆炎。危なげなく何とか命中したようで着弾したのが確認できた。
ここまでは初期アムロでも出来たことだ。
僕だって……まぁ、出来ないことは無かったのだろう。
ふぅ、とため息を吐きつつ前方へと注意を払ったままにしておく。
これからが本番だ。あの例のシーンが来るはず。
『続いて接近する物体二つあります。モビルスーツのようです！』
そらきた！
オスカー（仮）の報告は予想通りだ。通常の三倍のスピードで迫る

赤いザク。
『ザクか？』
『でもこんなスピードで迫れるザクなんて……』
『一機のザクは通常の三倍のスピードで接近します』
今度はメガネの人の方が声を挙げた。
さて、ここからはお決まりの例のやり取りである。
シャア専用ザク！通常の三倍のスピードで迫ってくるヤバいＭＳ！
このやり取りが有名過ぎて『シャア＝赤くて通常の三倍』が定着してしまっている。
ちなみにこの方程式を他のシャア専用気にも当てはめる人間が多くいるが、実際はそうではないっぽい。ズゴックもゲルググもそんな描写ないしね。
さらに言ってしまうとこのザクが通常の三倍というのも後の文献と言うか設定というかでは『指揮官型のＳ型ザクは通常の１．３倍の推力』という微妙な設定にされている。
オスカーとマーカーが見間違えたとでもいうのだろうか。
「あの、オスカーさん。１．３倍の見間違いとかないですか？」
『いや、データ上は確かに三倍だ。……あと僕マーカーなんだけど』
「オスカーさんの言うとおりか。じゃ、やっぱりデブリ踏んでるかリミッターとか外して三倍とかなのか？」
『だから僕はマーカー…』
ガンダムオタク積年の疑問が解決できてサッパリした気分である。ただ状況的にはこれからシャアキックがこれから待っているわけで、まずはそっちに集中したい。色々しゃべってるが無視することにする。
「……多分シャアです。赤いし、速いし。アレですよね。ルゥム戦役で五隻の戦艦を落としたという」
『う、うむ。そ、そうだ、君では無理だ、逃げろ！』
「問答無用！やります！」
さて、原作アムロは不意打ちを喰らったがこっちはシャアが来るこ

とは分かっているのである。ビームライフルで先制攻撃で一気に撃墜ないし破損まで持っていければ……と、一発射撃する。
恐らく『見せてもらおうか、連邦のＭＳの性の……ええい！』みたいなタイミングになっているはずである。舌でも噛めばいいのだ赤マスク。
「流石に甘くない、か」
が、余裕綽々で回避してみせた。伊達にエースとは呼ばれていないということだろう。
銃口見てから回避余裕はこの世界のエースのデフォルトなのだろうか。
「くっそ、思ったより早いぞシャア！」
何よりまずビュンビュン縦横無尽に回避しまくるのが思ったより恐ろしすぎる。
だが状況は好転してるはずだ。こっちのランダム射撃にシャアは減速してその都度回避せざるを得なくなっている。このままいけば……
「見失ったっ!?」
『後ろだ！』
リュウさんの警告。
その後に衝撃が伝わってきている。ライフルの射撃にさらされているのだ。
……ふぅ。大丈夫。ガンダムはザクマシンガンじゃ落ちない。取りあえずルナチタニウム合金様様だ。なのでやるべきことは、むやみやたらに動くことじゃなくて……
「後続のザクが狙い目とみた！」
後ろからノロノロ追走してくるザクである。取りあえずあっちを先に潰して、それからシャアザクだ。数的有利を取ってボコるのは基本。あらゆるゲーム、戦いの鉄則である。
案の定、落ち着いてロックして狙撃した結果、緑色のザクはあっさり撃墜できた。
「よぅし、リュウさん！二人でボコボコにしましょう！赤い彗星がな

んぼのもんじゃい！」
僕のやたら気合いの入った好戦的な言葉に『お、おう。そうだな！』と若干戸惑いつつも応じてバルカンとミサイルで牽制、回避あとを狙ってライフルで狙い撃ち、と射撃を繰り返す。これを繰り返した結果、ビームライフルは数弾残った状態でシャアを撤退に追い込むことができた。キックも喰らってない。これ、もしかして原作以上の戦果では？
「ふっ……ガンダムは伊達じゃない！ってところかぁ？」
まぁ結局ブライトさんには怒られたんですけどね。
ガンダムを着艦させた後にホワイトベースのブリッジに呼び出された。
入るなりカイさんがピースを向けてきたので僕も舌を出した変顔で答えたのだが、それがブライトさんの気に喰わなかったらしい。
色々ぐちぐちねちねち言われた挙句にガンダムの整備を丸投げされるというほぼ原作通りの展開を迎えた。
しょうがないね。
でも関係ないみたいな顔してるカイさんはどうかと思うから後で香港製のＩＣデータをぜひせしめたいと思う。
余談だがその後、ガンダムの整備など諸々をしにデッキへと向かった。
正直得意じゃない。
僕はアムロみたいに理工系の人間じゃないというか、どちらかと言うと文系の人間なのである。とは言えこの状況はそんなこと言ってもいられないので色々付け焼刃の知識でえっちらほっちらやっていると、セイラさんにいきなり呼び出された。
校舎裏こいや、みたいなノリである。
一緒に色々やってたジョブは「セイラさん呼んでるってよ」の一言で僕を送り出していきやがった。
「なんでしょうか」
「正直にお答えなさい。あなた、何を知っているの？」
「知っているって、何をですか？」

「とぼけるのはおやめなさい！知っていなければあんな……」
「僕は貴女のお兄さんのことは知りませんよ」
「っ!?」
「そう、知らないということにしておけます。だからあなたも、ね」
指を一文字にして口元にすっと乗せる。
そうすると僕はガンダムの整備へと戻った。
正直、結構ニヤニヤしている。なんか色々知ってるエージェント感あって楽しい。思わせぶりな態度がたまらない……もはやアムロというよりリボンズである。
自分でも感じは悪いと思う。だがセイラさんとの関係が初見でこじれた以上、これ以外に出来る反応は無い。
正直に「僕はあなたたちの関係をアニメ作品で見たので知ってます」なんて答えられるだろうか。
極限状態で錯乱したか、さもなくば馬鹿にしているかである。
それなら思わせぶりな態度でそれっぽくしている方がマシだろう。
ただ、日常生活を過ごすうえでずっとやって無きゃいけ無さそうなのが面倒くさいが。
……なんかいっつも取り返しのつかないことしてんな僕。